

醤油製造用大木桶に用いられた槓肌

牧野 久実 (教育学科)

Caulking Method Using Makihada for Large Wooden Barrels for Soy Sauce Fermentation

Kumi Makino

Department of Education, Kamakura Women's University

Abstract

There is no clear evidence to show that the caulking method of using makihada, the inner bark of a tree (mainly podocarp), was used for making large barrels for the traditional fermentation of soy sauce. The author interviewed one of the last traditional coopers making large barrels, Mr. Fujii and his family in the Sakai region of Osaka, and confirmed that this caulking method once was an important process. Caulking with makihada was one of the techniques used for building wooden ships and it might have been introduced to the making of large barrels as a result of the westward sailing route developed in the 17th century.

Key words: soy sauce barrel (tub), makihada, caulking method, traditions, westward sailing route

キーワード：醤油桶、槓肌、水漏れ防止、伝統、西廻り航路

1. 問題の所在

筆者は別稿において、今日我々が伝統と認識している技術がかつてのリノベーションであったことの事例として大木桶による醤油製造について提示し、この中で大木桶の建造に瀬戸内水運の発達や関連する和船技術、特に槓肌を活用したのではないかという仮説を述べた(牧野 2017)。本稿はこの仮説を検証するために行ったフィールドワーク等に関する報告である。

醤油製造用の大木桶は杉の板材を隙間なく並べ、竹釘で固定して建造する。運搬用の桶とは異なり、例えば32石、およそ6000リットル入りと大型である。小豆島において大木桶による伝統的醤油作りを継承し、大木桶そのものの製作にも取り組むヤマロク醤油5代目の山本康夫氏によると、時間が

立てば材が水分を含んで膨らみ、自然に合わせ目が閉じる。このため、大木桶作りに水漏れ防止用の充填材を使う工程は無いという説明であった。蔵に置かれた新造の桶から少しずつ液漏れする様子を見学したが(写真1)、このまま時間が経て



写真1 底から醤油が染み出た大桶
(撮影：牧野久実)

ば状態は安定するのだろうとその時には思った。

ところが、こうした説明と異なる事例を千葉県銚子市ヤマサ醤油「しょうゆ味わい体験館」展示コーナーの大木桶に偶然発見した。それは老朽化してひび割れた材の隙間から僅かにはみ出した縄のようなもので、これまで和船研究を行ってきた筆者の目には槓肌に見えた（写真2）。酒樽から転用したというこの大桶を製造するにあたり、この縄状のものはどの過程で打ち込まれたのか、職員や近隣の醤油製造業者などに問い合わせたが回答は得られなかった。

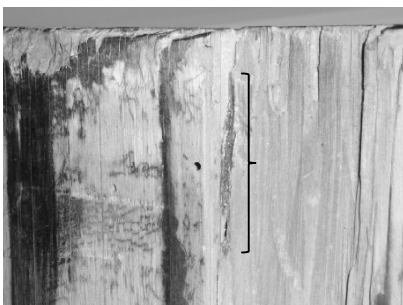


写真2 ヤマサ醤油展示資料（撮影：牧野久実）

2. 槓肌とは

槓肌は樹皮利用の一つの方法である。樹皮はすでに死んだ細胞であり、樹木そのものを傷めることなく剥ぎ取ることができる。樹皮を剥がす職人は原皮師（もとかわし）と呼ばれていた。樹皮は染色や製紙、皮なめしなどとして古くから利用され、現在もコルクが身近な樹皮製品である。槓以外に檜を用いることも知られており、その最古の例は668年に天智天皇の命によって建立された、近江國志賀郡の崇福寺の屋根材である（『扶桑略記』第五 天智天皇七年正月十七日条 黒坂（編）p.60）。

樹皮は油分を含むため、水漏れを防止する。この性質を利用し現在でも寺社の屋根などに用いられるが、叩いて繊維状にしたものを一般名称として槓肌などと呼ぶ。その他、槓皮、槓縄とも記され、また読み方もマキハダ、マイハダ、マキガワ、マキナワと多様である。その名が示すように、かつては槓、特に高野槓が最高級品とされた。一見すると長い髪の毛を編んだように見える

（写真3）。

江戸時代の本草学者、貝原益軒はその著『大和本草』において「犬マキ」はその実が大きく、まるで袈裟をかけた僧のような恰好をしているので羅漢松と呼ばれることや、先代旧事紀からの引用として腐りにくいので棺を作るのに使われたこと、羅漢松の皮のことを「筧」（マイハタとフリガナ添え）とも言い、船のスキマを塞ぐのに使われたことを説明している（国会図書館b p.21-22）。実際、6世紀初頭の百濟王、武寧の木棺は高野槓製であったが、全体を再現できるほど保存状態が良好だった（吉井 2001）。



写真3 木江郷土資料館所蔵の槓肌（撮影：牧野久実）

同様の記述は大阪堂嶋の金沢兼光が1761年（宝暦11年）に記した『和漢船用集』にも見られる（京都大学図書館機構b p.63）。そこには造船に欠かせない用具の1つとして「衣細」（「マキハタ」とフリガナ有り）という項目があり、水漏れ防止として船の隙間を塞ぐための「筧まきはた（原文通り）」が縄状のものを束ねた挿図とともに記されている。これらから、槓肌は特に高野槓や犬槓を材料としたもので、「衣細」や「筧」と表記され、マキハタやマイハタと呼ばれていたことがわかる。

槓肌は構造船の建造を可能にした擦り合わせの技術に不可欠であった。和船が1本の丸太を削り貫いた丸木船から材を一部追加した準構造船へ、そしてさらに何枚もの板材を合わせて大型化した構造船へと発達したことは良く知られている。構造船の建造を可能にしたのは、中世に発明された摺鋸（スリノコ）という特殊な鋸による板材の摺り合わせ技術による。摺鋸を板の合わせ目に挽き

入れ、程よい刻み目が入ったところに槓肌を竹製や金属製のヤトク（『和漢船用集』第12巻「大工道具之部」では「矢度古」と記されている：京都大学図書館機構 b 本文から片面ずつ数えて41-42頁）などと呼ばれる道具を使って叩き込む。槓肌は水分を吸収して膨らむため、進水時の水漏れを防ぐのである。

この技術を示す最古の例が近年、滋賀県長浜市塩津港遺跡で発見された（公益財団法人滋賀県文化財保護協会 2015）。それは平安時代後期の構造船で、船底の割れ目に直径1 cmほどに撚り合わせた槓肌が、約1 mにわたり詰め込まれていた（公益財団法人滋賀県文化財保護協会 2016）。

なお、広辞苑は「のみ」または「のめ」（細、枷、船笥、衣枷と表記）を槓肌と解説し、船に利用したことに言及した史料として『太平記』（1624年 寛永元年）の「渡りの船の底を二所えり貫て、のミを差し」、及びこれに関連する2箇所（京都大学図書館 a vol.34 pp.88-90）が示している（広辞苑 第7版 p.2293）。しかし、これらの引用箇所の脈絡からは隙間に詰め込むというよりも栓で穴をふさぐといった印象が強い。なお、明治時代の『絵本太平記』では「のミ」は「鑿」という漢字、すなわち柄に金属製の歯が付いた彫刻具を意味する漢字で表記されている。（国会図書館 a p.23）。恐らくこの時点で隙間全体に埋め込む槓肌ではなく、我々が知る彫刻具としての「のみ」と捉えられていたのだろう。

その他の槓肌利用の痕跡としては、数は少ないが考古資料に残された水道管や井戸に利用された事例がある。例えば、東京都千代田区丸の内三丁目遺跡、阿波徳島藩上屋敷跡からは板材を組み合わせた江戸時代の水道管や円筒状の井戸が出土している。このうち、水道管（木桶）の板材はコナラ属、アカガシ亜属の一種を板目板としたもので、板と板の間に槓肌が詰められていたことが報告されている（財団法人東京都教育文化財団・東京都埋蔵文化財センター（編）第1分冊 p.207）。なお、また、東京駅八重洲北口遺跡からも貞享年間（1684～1688年）とされる木桶の上水遺構が板材の間に槓肌を詰めた状態で検出されている（千代

田区東京駅八重洲北口遺跡調査会（編）第1分冊 p.188）。これらの資料の一部は東京都水道歴史館に展示されており、隙間に僅かに残る槓肌を今も確認することができる。

この地域に該当する記録として『玉川上水留』があり（「玉川上水呉服御門大番所掛桶柄御普請仕様注文」、桶筋に設置する埋枘の仕様見積として、全体を槓皮で入念に打ち固めることや、槓皮1束半で銀1.05匁、槓皮60束で銀48匁といった販売価格などが記されている（前掲第2分冊 pp.895-897、榮森他（編））。同様に、滋賀県でも近江八幡市安養寺遺跡や長浜市長浜城遺跡から江戸時代の導水管の継手に槓肌で漏水防止の工夫をしている事例が報告されている（堀 2016）。

以上のような報告例は、槓肌の使用範囲が造船だけではなく水道や井戸と広範囲に活用されていたことを示している。こうしたことから、醤油用大木桶の建造に槓肌が使用された可能性は高いと言える。

3. 槓肌は使われていた

醤油製造用大木桶の建造にはに充填材は使われなかったのだろうか。ヤマサの資料に見えた縄状のものは槓肌ではないのか。こうした疑問が発端となり、平成29年7月、伝統的醤油用大木桶製造を手掛ける大阪、堺市の藤井製桶所を訪ねた（写真4、5）。



写真4 藤井製桶所（撮影：牧野久実）

この製桶所は大正6年の創業で、現在91歳になる2代目当主を3人のご子息が継いで仕事を切り盛りしている。醤油や味噌、酒用の大桶造りを手掛ける日本で唯一の製桶所で、日本各地から多く

の職人たちが研鑽を積みここに訪れるという。

堺はかつて桶製造の中心地であった。紀州・吉野の山は良質な木材を算出し、また、灘や和歌山など、酒や醤油の産地が近隣にいくつもあった。また、水運を通じて輸送も容易だった。創業当時には堺だけでも47軒もの桶屋が軒を連ねていたというが、その後需要は落ち、現在では新造はほとんどなく修理が大半である。



写真5 藤井製桶所2代目ご主人
(撮影：牧野久実)

大がかりな木造建築と言えば記憶に新しいのが2013年に行われた伊勢神宮の神宮式年遷宮、即ち20年に一度の社殿の建替えである。宮大工は一生のうちに見習い、作業の中心、頭役、と3度の仕事をそれぞれの立場で経験する機会があり、技術も確実に後世に伝わる。しかし、大木桶は1度作ると50年～100年、手入れ次第では150年以上と長くもつ上、伊勢神宮のような定期的な建替えという習慣が無い。つまり、大桶職人にとって製造の場に立ち会う機会は一生に一度しか訪れないかもしれないのだ。加えて需要の減少は技術の継承にとって大打撃である。暇を持って余す時代が数十年も続いたが、和食文化への関心の高まりもあり、最近では日本全国の醤油、味噌などの製造業者から昔から使い続けた大桶の修理などの依頼が殺到しているという。

暑いさなかの作業中であり、極力お邪魔にならぬように努めたが、木の香りに満ちた作業場の雰囲気胸に高鳴る。それを抑えつつ、作業の合間に藤井氏に大木桶の製造、特に板材の接合に何を用了かを尋ねてみた。すると、他の醤油工場などで得た回答同様に「竹釘だ」と仰り、お手製の

ものを見せてくださった(写真6)。しかし、さらに「槓肌を使いませんでしたか？」と尋ねると、「実は使っていた」という回答を得ることができた。槓肌の使用を裏付ける証言はこれが初めて、しかも単に使用したことがあるというのではなく「欠かせなかった」というから驚きである。現在では槓肌の入手が困難となっているため、藤井氏は僅かに残った槓肌を今でも大切に保管している。



写真6 大木桶製造に用いる竹釘
(撮影：牧野久実)

藤井氏が作業場の床にチョークで描いたスケッチによると、槓肌を用いたのは大木桶の底部である(写真7)。

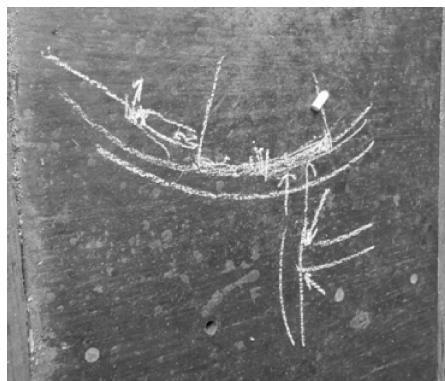


写真7 槓肌挿入箇所のスケッチ
(撮影：牧野久実)

材の隙間に詰め込むことで木のふくらみと同時に圧を高めて、水漏れを防止する。大木桶は胴部中程を緩やかに曲げ、ふくらみを持たせる。このため、木目は縦方向に揃えないと材に亀裂が入ってしまう。縦方向の材は、裏表が乾くと水分が木目に沿って上から下へと漏れ出るので、これを止めるために底部に槓肌を用了。

槓肌の打込みにはヤトクを使用する。筆者が知る琵琶湖の伝統的木造船には槓肌が切れないよう竹製のヤトクを用いていたが、藤井氏のものは金属製である（写真8）。また、琵琶湖の伝統的木造船の場合、槓肌を打込んだ後に墨と菜種油を混ぜたものを錆止めとして塗ったアカイタ（銅板）を被せることで、槓肌をはみ出ないように固定するが、大木桶ではこうした押さえはなく、打ちっぱなしだという。大型といえど船ほどではない大木桶には槓肌を固定する工夫は不要だったのかもしれない。なお、大木桶の側面板材の継ぎ目に槓肌を使ったかどうかについては証言を得ることができなかった。

現在、藤井氏は槓肌に代わる充填材を考案中だそう。しかし、どんな最新の技術をもってしても、槓肌に代わる使い勝手の良さは無いという。



写真8 藤井氏所蔵のヤトク（撮影：牧野久美）

槓肌を使わなくなった大きな原因は職人集団の解体にあるという。藤井氏は「とてもキツイ仕事でやりたがる人が居らず、昔は朝鮮半島から移住してきた人々が携わったが、継承する職人はすでに絶えて久しい」と話してくれた。

この近辺の槓肌職人は桜井や初瀬川周辺に多く住み、桜井市には最盛期で約30軒の業者があり、全国の3割を生産していた（桜井市人権・男女共同参画）。奈良の吉野や宇陀、桜井といった地域は良質な杉や檜の産地で、後述の広島県豊田郡大崎上島の木江町と共に檜を用いた槓肌の代表的産地であった。とりわけ大正時代中頃には拠点であった。桜井地域における槓肌産業の担い手となったのは主に韓国併合政策のもとに朝鮮半島から移り住んだ韓人たちであった。福島俊弘氏による長年

の聞き取り調査結果は藤井氏の証言を裏付けている（福島俊弘・中祢勝美 2015）。

4. かつての槓肌生産の拠点、大崎上島

瀬戸内水運の全盛期においても1つの槓肌産業の拠点だったのは広島県豊田郡大崎上島の明石（木江町）である。島の南東部にある明石町は、幕末から昭和初期にかけて槓肌生産の拠点であった。

海を隔てた香川県三豊市詫間町には、大崎上島の槓肌売りが船一杯の槓肌を積んでこの地にやってくるという民話『三頭さんの眷属と槓肌売り』が伝わる（詫間町役場総務課（編集・発行）。ただし、ここでは「眷屈」と記されている）。ある日詫間にやってきた槓肌売りが、知り合いの船大工の親方と話しこむうち槓肌を積んだ船が引き潮の間に岩間に挟まり動けなくなってしまう。潮が満ちるまで一夜を明かすうち、三頭さん（三頭大明神）の眷属（従者）を目撃するという恐ろしい体験をした槓肌売りは、詫間の船大工の親方宅に一晩泊めてほしいと乞う。ところが、一人漕ぎのさほど大きくないこの船には「何百両もの」槓肌が積まれており、留守にすることは不心得である。そこで、親方は自分の家ではなく槓肌売りの船で一晩共に過ごした、という物語である。この民話は確かに大崎が槓肌の産地であり、そこから小舟に積んで近隣に売り捌いていたこと、また槓肌が高額な品であったことを示すものである。

また、大崎上島の木江では女の子が生まれると檜を植え、結婚の時の持参金代わりにしていたという伝承を生名村の山本正義氏からの聞き取り調査結果として伝えている（愛媛県生涯学習センター）。

明石町にある木江郷土資料館（写真9）の展示資料や馬場宏氏の著書（馬場 1990 pp.30-31）によると、享和元年（1801年）に槓肌がこの地で生産され始め、やがて広島藩による免許制となると1856年（安政3年）には42の業者に鑑札が交付された。明治～昭和初期には全国の7割～8割の生産量を誇るようになった。約3尺（約90cm）の長さのものを10本1束を一張と数えるが、明石

を含む東野村では大正年に740、昭和5年に960の生産数量が記録されている（前掲 p.31）。



写真9 木江郷土資料館（撮影：牧野久実）

原材料となる檜皮は奈良の吉野や宇陀、桜井から運ばれ、これを槇肌加工したのち、四国、九州、阪神、遠くは朝鮮半島まで槇肌専用の船で運ばれた。島には一時30もの造船所があったが、船の時代が衰退すると槇肌生産も廃れ、昭和中期には最後の業者である森田槇肌工場も廃業に追い込まれた。その最後の様子を数多くの写真と共に聞き書きした榊原氏の論文は、今となつてはその頃の実態を記憶に留める大変貴重な資料である（榊原 1988）。なお、この頃まだ使用され榊原氏の論文にも掲載されている（前掲 pp.27-33）最後の槇肌船は、現在鳥羽市立海の博物館が所蔵している。

この頃の槇肌は檜皮が主原料であった。檜は70年以上のものでないと上質の槇肌ができない。乾燥が進むと樹皮が固くなり剥ぎ取りに手間がかかる。冬の作業はより困難だった。樹皮を蒸し、手で叩いて、後には機械を用いて、繊維を柔らかくする。この仕事に従事した女性たちの身体は全身檜粉で真っ赤に染まったそうだ。江戸後期に流行した狂俳には、「まき肌の粉が眼へ這入」の句が残されているが（鈴木（校訂） p.284）、当時より扱いが厄介な代物だったのだろう。

ここ大崎上島が槇肌製造の拠点であった理由は瀬戸内水運にある。前回の論考でも触れたように、寛文12年（1672年）に江戸の商人河村瑞賢によって確立された西廻り航路の開発、即ち日本海沿岸をぐるりと西廻りに大阪へ（図1）、さらには江戸まで大量の積み荷を運ぶ水運の開発により、瀬戸内を航行する船も大型化し、物資の輸送量も大幅に増加した。

しかし、蒸気やエンジンが搭載される以前の帆船の時代、最も安全なのは山や岬を手掛かりに古来の山陽道南岸を陸地に沿って航行する安芸地乗りであった。いくつもの瀬戸を通り抜けながらのこの航法は、目視できる昼間に限定された。近世になると夜間も船を進めることができたり、来島瀬戸を通る沖乗りのコースも取られたが、ここは潮流が速く島や岩礁があるため困難であった。沖乗りは安全性より速度を優先するものであり、海難事故も頻発した。

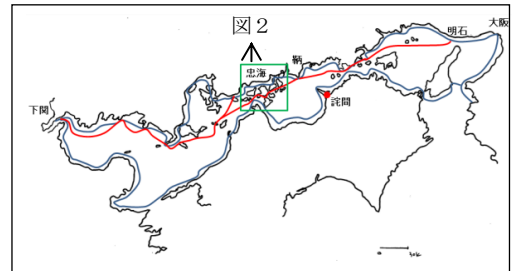


図1 瀬戸内の主な航路

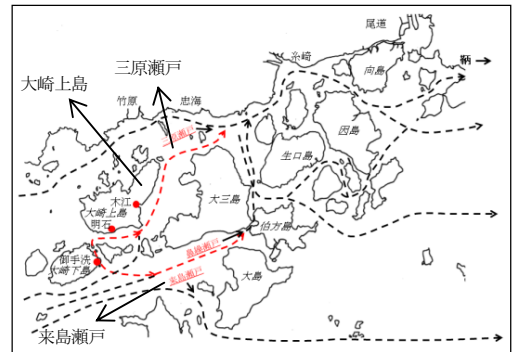


図2 大崎上島周辺の主な航路

その点、地乗り航法、とりわけ御手洗から大崎上島の木江、鮎崎を通り糸崎へ抜ける三原瀬戸を通るコースはいざという時に船着き場を確保できるために安全性が高く、また長時間にわたって同じ方向への潮流が続くので航行そのものも比較的楽だった（前掲 p.45）。こうした中、大崎上島は地乗り航法ではもとより、沖乗りの際にも必要に応じて船を係留しメンテナンスを行うための良い位置にあったと言える。特に三原瀬戸が発達する明治以後は鮎崎や木江といった大崎上島の港が繁栄するようになった。

このことの背景には筑後からの石炭輸送も関連している。瀬戸内各地域で盛んだった塩田では塩作りの燃料として当初は薪を使用していたが、19世紀初頭になると筑後の三池炭鉱等から採掘された大量の石炭が遠賀川沿いに、さらに海域を通じて運ばれるようになった。醤油の原料である大豆と塩、そしてその産物である醤油の輸送を支えたのが瀬戸内海運の入口で積まれた石炭であり、これらの輸送の安全面を陰で支えたのが槇肌産業ということになる。

実際に竹原港から大崎上島までのフェリーに乗船すると、ここが極めて穏やかな海域であることを体感する。フェリー会社に尋ねたところ、濃霧のために欠航となることはあるが、波がそこまで荒くなることはまずないという。また、小さな島が点々とする一帯の景色から、帆船が利用されたこの時代に安全な航行と風待ちをするためのいくつかの寄港地を提供したことが実感できる。島々はいわば高速道路のパーキングエリアのようなもので、船頭にとっては陸（オカ）に上がって身体を休めるだけでなく、その後の航行の安全性を確保するための船のメンテナンスを行う重要な拠点であった。

船のメンテナンスに際して槇肌がいかに重要であったかは、船大工からの聞き取り調査や展示後の復元和船の様子からも知ることができる（出口1999 pp.28-29）。しかも、完成した船に使用された槇肌は、展示して数年たつと徐々に乾燥し痩せ、やがて材の間から顔を見せるようになった。水中と陸を往来しても槇肌のへたりを防ぐことはできない。陸に上げたきりの展示物はなおさらである。あるとき、この丸子船を博物館から出して琵琶湖に浮かべようという案が持ち上がった。その際に真っ先に問題となったのが槇肌についてであった。船大工は「船全体の槇肌を打ち直さねば浸水して浮かべることはできない」という。その経費はざっと見積もっても数千万円ということで、やむなくその計画は忘れ去られることとなった。

上記の話からわかることは、和船にメンテナンスは欠かせず、特に槇肌は一度打込んだら終わりというわけではなく、こまめに差し替える必要が

あるということである。かつての上島大崎では槇肌の他に船釘やその他の造船部品も製造していたが、これらは瀬戸内水運を陰で支える一大産業であったといえる。

5. 結びに変えて

以上のように、近世以後の瀬戸内水運と槇肌産業及び醤油製造は密接に関連していた。大崎上島やその後の桜井が槇肌製作の拠点となったことも水運が大きく関係している。こうした中、醤油製造用大木桶に槇肌が使用されていたという仮説はそれなりの合理性を持つと思われる。ただ、今回明らかとなった証言は現段階においては例外的という可能性も否めないの、新たな資料を今後も模索する必要がある。

また、実物資料についての調査上の問題も存在する。既述のとおり、槇肌は剥がした樹皮を縄状に撚り合わせたものであり、数年単位で交換も必要なほど乾燥に脆弱な材料である。このことから、遺跡への残存はもとより、民俗資料においてもよほど注意しなければ見落とす可能性が高い。

槇肌は道具としても研究課題としても脇役かもしれないが、今後も調査を継続していきたい。

謝辞

本稿を作成するにあたって、大阪、堺市の藤井製桶所の皆様、とりわけ藤井泰三氏にはお忙しい中を貴重なお話を聞かせていただいた。この場をお借りして厚く御礼申し上げたい。

参考文献

- 榮森康治郎他（編）2000 『江戸上水の技術と経理』 クオリ 東京。
- 黒坂勝美（編）1965 『国史大系第12巻』 新訂増補版 吉川弘文館
- 小泉和子（編）2000 『桶と樽 脇役の日本史』 法政大学出版局 東京。
- 公益財団法人滋賀県文化財保護協会 2015 「塩津港遺跡発掘調査現地説明会資料」 公益財団法人滋賀県文化財保護協会 滋賀。
- 榊原貴士 1988 「瀬戸内の槇皮船」 『あるく・

- みる・きく』255 pp.4-39 近畿日本ツーリスト 東京.
- 詫間町役場総務課 (編集・発行) 1995 「三頭さんの眷屈と槇肌売り」たくまの民話と伝統 (68) 『広報たくま』3月号 4 詫間町役場総務課 香川.
- 鈴木勝忠 (校訂) 1985 「続太はし集 三編 (弘化5年)」 『雑俳集成 第一期 十二 天保名古屋狂俳集』 pp.279-311 東洋書院 東京.
- 出口晶子 1999 「丸子船の復元-再生する人・モノ・技」 用田政晴・牧野久実 (編) 『よみがえる丸子船』琵琶湖博物館研究調査報告13号 pp.17-52 滋賀県立琵琶湖博物館 滋賀.
- 千代田区東京駅八重洲北口遺跡調査会 (編) 2003 『東京駅八重洲北口遺跡 第1,2分冊』森トラスト株式会社・千代田区東京駅八重洲北口遺跡調査会 東京.
- 東京都教育文化財団・東京都埋蔵文化財センター (編) 1994 『丸ノ内三丁目遺跡』東京都生活局発行 東京.
- 福島俊弘・中祢勝美 2015 「夜間中学の窓から見える私たちの社会」 『天理大学人権問題研究室紀要』第18号 pp.49-66 天理大学 奈良.
- 牧野久実 2008 『琵琶湖の伝統的木造船の変容-特に丸子船を中心に』 雄山閣 東京.
- 牧野久実 2017 「醬と和船-伝統文化に関する覚書-」 『鎌倉女子大学紀要』第24巻 pp.91-98 鎌倉女子大学 神奈川.
- 吉井秀夫 2001 「武寧王陵の木棺」 『百済麻王武寧王陵発掘後30年の足跡』 pp.167-179 国立公州博物館 (韓国語)
- インターネット文献**
- 愛媛県生涯学習センター 2009 「瀬戸内の島々の生活文化」 『えひめの記憶』 愛媛県生涯学習センター (アクセス年: 2018.6.13~)
- 京都大学図書館機構 a 1999 「新田佐兵衛佐義興自害事」 1624年 『太平記 巻33』 Vol.34 京都大学電子図書館貴重資料デジタルアーカイブ (アクセス年: 2018.7.8~)
- 京都大学図書館機構 b 1999 「用具之部 網類之部」 金沢兼光 (編) 1761年 『和漢船用集』 巻十一 京都大学電子図書館貴重資料デジタルアーカイブ (アクセス年: 2018.7.10~)
- 公益財団法人滋賀県文化財保護協会 2016 「船板に使われていた「マキハダ」を確認-塩津港遺跡出土品」 公益財団法人滋賀県文化財保護協会 (アクセス年: 2018.6.13~)
- 国会図書館 a 2011 「新田佐兵衛佐義興自害事」 1883-4年 中村頼治 (増補) 『絵本太平記』 巻之三十三 国会図書館デジタルコレクション (アクセス年: 2018.7.10~)
- 国会図書館 b 2011 「羅漢 (イヌマキ) 松」 1709年 貝原益軒 (編纂) 『大和本草』 巻之十一 木之中 第11巻 国会図書館デジタルコレクション (アクセス年: 2018.7.10~)
- 桜井市人権・男女共同参画 2014 「材木の町桜井市と檜縄づくり」 『人権ゆかりの地をたずねて』 (アクセス年: 2018.6.7~)
- 馬場宏 1990 『東野村と船』 東野町シリーズ2 東野町 (アクセス年: 2018.6.6~)
- 堀真人 2016 「調査員オススメの逸品 第196回 今に続く、古代の防水技術-楨皮 (マイハダ)」 『近江歴史探訪-文化財からみた近江の歴史』 公益財団法人滋賀県文化財保護協会 (アクセス年: 2018.6.6~)

要旨

本稿は、伝統的な大木桶の建造に和船建造の技術、特に板の擦り合わせ技術が用いられたという仮説 (牧野 2017) を検証する論考である。板の擦り合わせ技術に重要な材料となるのは楨の楨皮を縄状にした楨肌であるが、今回日本で唯一醤油大桶の製造を手掛ける職人に聞き取り調査を行い、かつては楨肌を用いていたことを確認した。

これまで竹釘のみで材を合わせ、漏れ出る醤油で材が膨らむことで合わせ目が閉じるということが定説だったが、今回得られた証言は醤油桶の建造のみならず、かつての楨肌の利用や製造に関してより広範囲に調べる必要を示唆する重要な証言と言える。これに関連して、楨肌の利用に関する現存資料や史料を整理した。

(2018年7月20日受稿)